



今月の野菜紹介

「ほうれん草」

◆栽培時期にあつた品種を

ほうれん草は栽培時期が広いと思つている方も多いかもしれませんが、実は季節によつて求められる能力が異なります。品種によつて、暑さや寒さに対する強さ、病気への耐病性、さらには立性や葉の形など様々です。

葉物野菜は品種選びが生育を大きく左右するので、栽培時期はもちろんのこと、自分の栽培スタンスに適した品種を選ぶようにします。

◆無理な早まきは禁物

ほうれん草の発芽・生育適温は、15〜20℃と言われており、25℃以上では発芽が悪くなります。そのため、秋まきの場合、あまり無理な早まきを行うと、発芽揃いが悪くなります。夏の暑さが一息ついた9月頃からの方が発芽が安定しやすくなります。

どうしても早く播種を行いたい場合などは、寒冷紗被覆を行つて、地温を下げてやるとういでしょう。

◆本葉4枚目までは水を控える

ほうれん草で難しいのは、発芽後に次々と株が枯れていく立枯病の発生です。特に本葉4枚目が展葉する頃までが、最も立枯病が発生しやすい時期になります。

そのため、播種から発芽が揃うまではある程度適湿に保つ必要がありますが、発芽が揃つたら、本葉4枚目の頃までは出来る限り灌水を控え、乾き気味で管理することが、立枯病予防の鉄則です。

◆露地で必須のトンネル栽培

発芽〜本葉4枚目までの頃に乾き気味の管理を、露地で行う場合は雨除けのトンネルが必須です。このトンネルを行うことで、葉への泥はねも抑えることができます。

この時、大切になのは、風通し



を良くし、あくまで「雨除け」としてのトンネルとして設置を行うことです。その場合、被覆資材はマルチなどに利用する透明の農ポリで構いません。

「シロオビノメイガ」

知っておきたい病害虫

シロオビノメイガは、主にほうれん草を食害することで有名なチョウ目（鱗翅目）の害虫です。その名の通り、成虫の状態では白い帯の入った翅をもつのが特徴です。

終齢幼虫でも体長が1・5程と比較的小型の害虫で、胴部が緑色を帯びているものの、表皮が透けて見えるのが特徴です。

幼虫は葉裏に寄生し、表皮だけを薄く残して葉肉を食害していきます。幼虫



は成長すると、糸を吐いて2〜3枚葉を綴り合わせた内部に生息して食害します。多発した場合は終齢幼虫によつて食い荒らされて、葉はしだいに穴があき、最後は葉柄だけの丸坊主になることもあります。

【主な対策】

- 周囲の雑草に発生することが多いので、ほ場周囲の草刈りに努める。
- 施設栽培では目合い4〜5ミリの防虫ネットを張つて、成虫の侵入を阻止する。
- 定期的には場を巡回して、早期防除に努める。また「シロオビノメイガ」として登録のある薬剤は少ないが、同じ鱗翅目害虫の「ヨトウムシ」等の登録薬剤でも効果が期待できる。
- プレバソンフロアブル5
- デイアナSC
- パタンSG水溶剤 など

※適用内容は品目によつて異なりますので、ご確認の上、使用してください。